

三重大学大学院生物資源学研究科－
スリウィジャヤ大学大学院作物科学研究科
総合的食料生産・管理計画学
ダブルディグリープログラムの創設

江原 宏*・神原 淳

三重大学大学院生物資源学研究科

**The Establishment of Double Degree Master Program
on “Integrated Food Production and Management Planning”
by Graduate School of Bioresources, Mie University, Japan
and Graduate School of Crop Sciences, Sriwijaya University, Indonesia**

Hiroshi EHARA* and Jun KOHBARA

Graduate School of Bioresources, Mie University, 1577 Kurimamachiya, Tsu, Mie 514-8507, Japan

Abstract

Rising world population, increasing urbanization, casting doubts about the sustainability of intensive food production systems and an apparent slow-down in the rate of yield increase in the major food resources have led some observers to argue for a higher priority to pure and applied scientific researches and investments for increasing the productivity and production amount of economic plants and animals. In addition, a new competition between food supply and alternative energy production has been occurred recently. At the same time, the establishment of international education programs and enrichment of the contents have been needed for the enhancement of contemporary globalization in higher education. Therefore, in response to the food supply and distribution problems on the global, regional and local scales, Mie University (MU) and Sriwijaya University (UNSRI) in Republic of Indonesia agreed in July, 2008 to carry out the Double Degree Master Program (Collaborative Degree Program) based on the Agreement of “Academic Cooperation and Exchange” between the two universities. Graduate School of Bioresources, MU and Graduate School of Crop Sciences, UNSRI established “Integrated Food Production and Management Planning” Program (DD-IFP) supported by Ministry of National Education, Republic of Indonesia in April, 2009. The establishment of the DD-IFP collaboratively by MU and UNSRI reflects three principal needs, not only institutional and academic needs but also professional need. From the viewpoint of professional need, the establishment of the DD-IFD is projected to contribute surely toward the rearing of professional human resources who are expected as worldwide Asian leaders having strong background of knowledge on food production and management.

Key Words: International Education, Double Degree Program, Food Production, Indonesia,
Master Degree

インドネシア, 国際教育, 修士, 食料生産, ダブルディグリー

1. はじめに

昭和58年の中曽根政権下で始まった留学生10万人計画は、目標とされた平成12年から3年後の平成15年に達成され、現在、日本で学んでいる留学生の総数は12万人超となっている。また、昨年1月には、福田康夫首相（当時）が施政方針演説で留学生の大幅な拡大を表明し、この方針に基づき、全世界から優秀な学生を獲得することによって日本の競争力を高めるグローバル戦略の一環としての「留学生30万人計画」が策定された。文部科学省、外務省、法務省など6省が連携し、①留学情報の発信、②留学生への生活支援、③卒業後の就職・起業支援などを行うものである。さらにこの施策に引き続き、平成21年度には文部科学省によるグローバル30事業が始まるなど、最近の高等教育における国際化は急速な展開をみせようとしている。このような教育の国際化は世界的な趨勢であり、特に先進諸国では各界における優秀な人材の確保の意味もあり、国際教育プログラムの整備が推し進められている。日本においては、平成17年の国立大学の法人化以降、教育研究予算全般にわたって競争的資金獲得が強く求められるようになり、国際教育に関しては、特異な教育コンテンツを提供する英語によるコースや専攻などに国費留学生が重点的に配置されるなど、文教予算が傾斜配分されるようになっているのが現状である。本学が設定した法人化後の第一期中期計画・中期目標の中で、生物資源学研究科としては、地域・国際社会で活躍できる研究者・高度専門職業人育成のために地域性や国際性に配慮したカリキュラムの拡充に取り組んでいる。

本学における国際教育関連事業の中で生物資源学研究科／学部が関わってきたものとしては、平成5年にタイのチェンマイ大学、中国の江蘇大学とスタートさせた3大学国際ジョイントセミナー・シンポジウム（当初は3カ国3大学の共同事業として始めたが、現在はアジア・太平洋、アフリカ、欧米から十数カ国の参加に拡大している）、平成19年より本格的に取り組んでいるタイの6大学（チェンマイ大学、カセサート大学、コンケン大学、スラナリー工科大学、タマサート大学、モンクット王ラクラバン工科大学）との国際インターシッピングプログラムがある。その他、従来の協定

大学等からの学生の受け入れでは、これまでも国費、その他の奨学金などにより多くの正規生を受け入れてきた実績を有する（平成20年の修士の学位授与数は106であり、前年の学校基本調査による農学系大学院の総修了者数を全研究科数で除した数58を大きく上回る）。しかしながら、学位取得に結びつくような留学事業は、受け入れに偏った一方向的なものであった。日本学生支援機構などのプログラムによる短期留学生としての派遣事業においては、一部の協定大学と単位の互換（受け入れ大学が評価を出した成績を、派遣大学側が単位として認定する形式）が行われているものの、特定の大学との間における双方向による単位互換ではなく、本学の学生が学位取得のために留学するようなプログラムの設置には至っていなかった。今期中期計画・目標を達成した上で、次期中期計画・目標において海外との学生交流事業の更なる発展を目指すために、国際教育における単位互換の実質化、それを基本とする国際性豊かな人材の育成に向けた具体的な教育プログラムの整備が大きな課題の一つであったといえる。

2. 大学院教育の国際化とダブルディグリープログラム構築への道のり

このような状況の中で、平成19年6月15日にインドネシアのスリウィジャヤ大学（スマトラ島の南スマトラ州の州都であるパレンバン市とその郊外のインドララヤ市にキャンパスを持ち、大学名は7世紀から約500年間栄えた仏教王国の名に由来する）からザイナル・リドゥホ・ジャファール総長、ルジト・アグス・スイグニョ副総長（学術担当）、R. H. A. ハミッド・ラシッド副総長（国際担当）、クルディ・シャムスリ大学院長、ヒルダ・ズルキフリ大学院長補佐他の訪問を受けた。工学、医学系、生物資源学の理系3研究科、生命科学支援センターの施設を案内し、大学間交流に向けて関係委員と意見交換の機会を持った。この時点までに、本学とスリウィジャヤ大学との間では、日本学術振興会の事業や民間財団の助成による本学教員の派遣、日本国際教育協会（現日本学生支援機構）事業によるスリウィジャヤ大学教員の受け入れなどの交流実績があった。これらの国際交流実績を基に、①大学間の一般協定、学

生交流の覚書の締結, ②インドネシア政府が今後数年間で5000人の大学教員を修士・博士の学位取得のために海外派遣する事業における若手教員の受け入れ, さらに, ③修士の共同教育プログラム創設に当たってのパートナーとなって欲しいということが, スリウィジャヤ大学代表団からの要望であった(図1)。

スリウィジャヤ大学は先進的な大学であり, 広いスマトラの中でも地域の発展を担う中核的な高等教育機関である(図2および図3)。歴史も古く,

設立は1958年, 現在は, 経済学, 法学, 工学, 医学, 農学, 教育学, 理数学, 社会政策学, コンピュータサイエンスの9学部を有し, 約2万人の学生が学ぶ総合大学である。作物科学, アグリビジネス・アグロインダストリー, 経済学, 法学, 語学教育, 化学工学, 医科学, 土木学, 環境マネジメント, 社会管理学, 数学教育プログラムなどの修士課程, 農学, 環境科学の博士課程が設置されている。国際教育においても, オランダのUNESCO-IHE (Institute for Water Education)



図1. スリウィジャヤ大学訪問団(左から2, 3, 4, 8, 9, 10人目)と本学スタッフ



Location: Inderalaya, 35 km south of Palembang, the capital city of South Sumatera Province, Indonesia

Facilities		
Palembang Campus		20 Ha
Inderalaya Campus		712 Ha
Students		
STUDENT BODY	Undergraduate	18,258
	Graduate	1,271
ENROLLMENT	Under-graduate	4,847
	Graduate	298
ALUMNI	Under-graduate	55,616
	Graduate	1,229
Academic & Non Academic Staff		
ACADEMIC STAFF		1,150
EDUCATION	BS	450
	MS	576
	Ph.D.	109
ACADEMIC RANK	Professor	33
	Associate Professor	365
	Assistant Professor	404
	Lecturer	340
FACULTY : STUDENT RATIO		1:16
ADMINISTRATIVE STAFF		785
ADM. STAFF: STUDENT RATIO		1:27

図2. スリウィジャヤ大学の所在と規模

との環境調和型低地開発管理計画分野の修士ダブルディグリープログラムを実施し、ユトレヒト大学と数学教育における国際プログラム創設に向けた整備を進めるなど、先端的取り組みが際立っている。

先方からの訪問を受けた後、実務レベルの調整を重ね、平成19年11月6日に初めての取り組みとしてビデオ会議システムを用いた調印式を開き、本学からは豊田長康学長、小林英雄理事・副学長（国際交流・情報担当）および責任部局の生物資源学研究科から国際交流部会長として江原（役職はいずれも当時：他の箇所も同様）が、スリウィジャヤ大学からはザイナル総長、ルジト副総長以下、大学執行部が出席し、一般協定と学生交流の覚書が締結された（図4）。そして、大学間協定締結から直ちに、実質的な国際共同教育研究事業を展開するために具体的なプログラムの検討に取

組んだ。特に、生物資源学研究科に客員研究員として滞在した経験を持つルジト副総長の主導で、食料生産分野における教育プログラムの創設がまず協議されることになった。

スリウィジャヤ大学との協定締結と時を同じくして、インドネシア国家開発計画局の修士ダブルディグリー推進事業（日本国際協力銀行による円借款事業）において、慶応大学や政策大学院大学など日本のいくつかの大学がインドネシアの大学と社会学分野のダブルディグリー制度をスタートさせていた。スリウィジャヤ大学は当初、本学との食料生産分野のプログラムを国家開発局の支援事業として設置しようとした。しかし、修士課程教育の充実により中央政府の中堅、地方の行政を担うトップ人材を育成したいという国家開発局の事業方針が示されたことから、国家教育省の事業に支援を求めることとした。本学側からも平成



図3. スリウィジャヤ大院・作物科学研究科校舎（左：パレンバン市）と学部キャンパスの本部建物（右：インドララヤ市）



図4. ビデオ会議システムを通じて行われた大学間協定調印式（三重大学学長室の様子）

20年3月には生物資源学研究科の学務委員長の神原と国際交流部会長の江原が派遣され、ジャカルタの国家教育省を訪問し、プログラムの骨子について国際交流局との協議に臨むなど、積極的にアプローチを重ねた。最終的には、同省のエグゼレントスカラーシッププログラムの一環として三重大学とスリウィジャヤ大学による「総合的食料生産・管理計画学プログラム (Integrated Food Production and Management Planning)」を設置することで合意に達し、時限でない継続的なプログラムとして毎年一定枠の奨学金が支給されることとなった。このようなテーマを掲げたプログラムが設定されたのは、特定のテーマに基づいた内容を取り扱うことが望ましいというインドネシア国家教育省側からの要望の上に、増え続ける世界人口と都市への集中、主要食用生物資源の生産性の伸び悩みと食料生産の持続性への不安、さらには近年の化石燃料枯渇の危惧に伴う食料生産とバイオマスエネルギー生産との間で新たな競合が生じているという背景がある。後述のように本プログラムは、食料生産を取り巻く現代の諸問題に総合的に取り組むことができる人材、ワールドワイドに活躍できる次世代のアジアのリーダーの育成を目標としている。

テーマの決定を受けて、ダブルディグリープログラムの実施に向けた具体的なカリキュラムの内容について、研究科内の国際交流・社会連携委員会国際交流部会、学務委員会大学院教務部会、入試委員会大学院入試部会が合同で課題の検討に当たり、学内では、東企画担当理事、野村教育担当理事、小林国際交流・情報担当理事をはじめ、学術情報部国際交流チーム、学務部学生サービスチーム、財務部など関係部署との協議を進めた。平成20年6月には瀬古国際交流チームリーダー、諸岡生物資源学研究科チームリーダー、吉田学務チーフとともに神原、江原が文部科学省を訪ねて高等教育局大学振興課の指導を受け、イーコールパートナーシップを基本とした相互派遣型のダブルディグリー制度を実施するための入試、カリキュラム、学位授与などのシステムについて整備を進め、平成20年7月に小林理事ならびに田中生物資源学研究科長とハミッド・ラシッド副総長（国際担当）ならびに M.T.カマルディン大学院長との間でダブルディグリープログラム実施に関する覚書の調

印に至った。

以上のように、スリウィジャヤ大学とのダブルディグリープログラムは、本学におけるキャンパスの国際化を加速するための最初の礎として、大きく貢献するものと期待されている。

3. プログラムにおける人材育成の目標と質保証

総合的食料生産とその管理計画においては、科学技術的側面から社会的・文化的側面に至るまでの食料生産に関する幅広い知識と技術が重要な要素となる。生物資源学研究科は、理系研究科としてはユニークな、実験系と社会系が融合した総合農学の流れを汲む文理融合型の特色ある教育課程を有しており、さらに、東南アジア域を含む海外をフィールドとする多彩な研究実績も有し、上述の知識と技術に関しての必要かつ十分な教育を提供できるバックグラウンドがあるが、先に述べたように大学院教育のさらなる国際化が課題のひとつとなっている。また、スリウィジャヤ大学は、地域の発展を担うトップ人材の育成、海外の高等教育機関との連携強化等を急務としている。以上のような背景から、本ダブルディグリープログラムは、三重大学とスリウィジャヤ大学が、それぞれの大学が目標としている課題のマッチングを基に、将来のアジア諸国における食料生産とその管理計画の重要性、およびこの重要性に対する両大学の責務を鑑み、協力して以下の専門的知識と技術を総合的に身につけた人材を育成するための教育プログラムである。

- ・食料生産に関する技術とその基盤となる土壌、水、植物等の天然資源管理技術。
- ・食料生産力の増大における管理計画の重要性を理解する能力。

上記の人材育成の目標を達成するため、本プログラムでは両大学の教育システムの特徴や長所をシンクロナイズさせることができ、かつ両大学教員の教育現場における相互協力の助長、さらには大学院生も含めた研究交流の発展を期待できるダブルディグリー形式を採用した（図5）。カリキュラムでは以下の工夫によって教育効果を高め、本プログラムの人材養成目的の達成を目指している。

- 1) 入口の質保証：プログラム候補生に対し、プログラム入学前に半年間の予備教育期間を設け



図5. 総合的食料生産・管理計画学ダブルディグリープログラムのイメージ

(専門基礎，語学)，基礎学力の保証を行う。

- 2) 学習内容の質保証（1年次）：プログラム入学後1年間（プログラム1年次）はスリウィジャヤ大学大学院作物科学研究科において，専門基礎科目を履修し，総合的食料生産・管理計画学に関する基礎的素養を涵養する。その後，二次選抜に合格した者が，プログラム2年次に進級する。
- 3) 学習内容の質保証（2年次）：プログラム2年次は，三重大学大学院生物資源学研究科に在籍し，同研究科が開設している授業科目を修得するとともに必要な研究指導を受ける。この過程で総合的食料生産・管理計画学に関する専門的素養とともに将来の教育者・研究者としての教育研究能力の涵養を行う。また，プログラム1・2年次ともに両大学の教員が協力して教育にあたる。
- 4) 出口での質保証：本プログラムでは，我が国の大学院修士課程の修了要件が30単位であるのに対して，47単位というハードルの高いプログラム修了要件を設定し，身につけるべき資質を保証している。

4. 事前トレーニングとプログラム学生選抜

先に述べたように DD-IFP プログラムの特徴のひとつとして，入口の質保証が上げられる。したがって，プログラム候補学生に対し，プログラ

ム入学前に半年間の予備教育期間を設け（専門基礎，語学），基礎学力の保証を行う。図6にそのフローチャートを示す。まず，インドネシア人学生の選考は，学習能力テスト（TPA），TOEFL テスト（スコア550以上）を含んだインドネシア国家教育省国際教育局ならびにインドネシア国家開発計画庁の基準を参考として実施し，これらの条件を満たした者が DD-IFP プログラム1年次に入学することができる。また，日本人学生の場合は，生物資源学研究科博士前期課程入学試験に合格した後，大学院入学前の半年間に三重大学において上級英語に関する科目について少なくとも2科目以上の単位取得を義務づけ，これらの条件を満たした者が DD-IFP プログラム1年次に入学することができる。この後，日本人学生もインドネシア人学生もスリウィジャヤ大学大学院作物科学研究科で所定のプログラム科目（27単位）を履修するが，プログラム学生は DD プログラム2年次になる時点で，さらなる選抜が行われる。インドネシア人学生に対しては，2次選考は，生物資源学研究科博士前期課程外国人特別選抜入学試験として実施する。すなわち，スリウィジャヤ大学に本研究科入試実施委員が赴き，スリウィジャヤ大学試験場と本研究科入試実施本部とをビデオ会議システムによって結んで実施する。また，既に本研究科博士前期課程学生となっている日本人学生に対しては，スリウィジャヤ大学大学院作物科学研究科におけるプログラム科目に関しての単

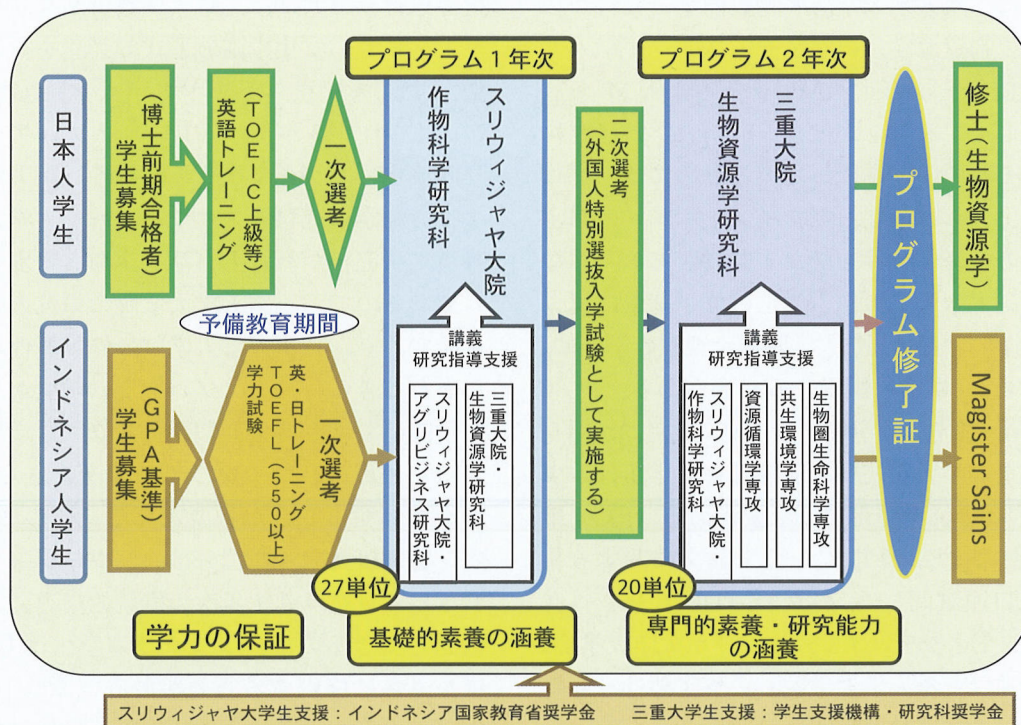


図6. ダブルディグリープログラムにおける学生選抜とプログラムの流れ

位取得状況がチェックされ進級判定が行われる。このようにしてプログラム入学時とプログラム2年進級時に入口の質保証がチェックできるようになっている。

ところで、ダブルディグリープログラムによる学生受け入れに際しては、様々な面からの対応も必要であった。たとえば、現行の制度では、留学生は母国の奨学金を得るためには日本の大学からの受け入れ承諾書が必要であり、渡日に際しては受け入れ承諾書を日本の入国管理局へ提出して在留資格証明書の発行を受け、在外の日本大使館にビザ発給申請を行う必要がある。しかし、日本の大学では、入学試験の合格が決まってからでないと正規生としての受け入れ承諾書を出せないことから、日本から奨学金の支給を受ける国費留学生や私費留学生の場合は一旦研究生として入学した後、入学試験を受験していた。ところが、母国の奨学金を受ける場合には研究生期間は対象とならないケースが少なくない。また、ダブルディグリープログラムとして協定大学と共同で教育に当たる場合、海外の大学で1年の修学期間の後に日本で1年間学ぶことを想定すると、遅滞なくプログラム2年次に進級する必要がある。そのためには、渡日前に正規生として在籍できる資格が得ら

れていなければならない。その点も含め、スリウィジャヤ大学側におけるプログラム1年次に入る前の学生の選抜と、プログラム2年次として三重大学が主体的に取り組むべき選抜の実施要領を策定に向け、平成20年11月には橋本篤入試委員長、神原、江原がスリウィジャヤ大学を訪問し、学生選抜の制度的、技術的な条件整備を協議した。以上のような実質的な部分での対応についても配慮しつつ、プログラム構築を進めていった。

5. カリキュラム構築

先にも述べたように本ダブルディグリープログラムでは両大学の教育システムの特徴や長所をシンクロナイズさせることができ、かつ両大学教員の教育現場における相互協力の助長等を期待できるダブルディグリー形式を採用している。プログラム修業期間としては2年間を設定し、プログラム1年次はスリウィジャヤ大学大学院作物科学研究科において、所定の単位を取得する。この後に、プログラム2年次生として生物資源学研究科に入学し、所定の単位を取得する。両研究科が行う修士論文の審査および最終試験に合格したときは、総合的食料生産・管理計画学プログラムの修了証

書ならびに三重大学大学院生物資源学研究科からは修士（生物資源学）の学位を，スリウィジャヤ大学大学院からは修士（Magister Sains, M. Si）の学位を取得することができる。両大学の研究科からそれぞれの学位を授与されるためには，プログラム学生は，日本ならびにインドネシアの修士学位の両方の修了要件を満たす必要がある。すなわち，インドネシアの修士学位の修了基準に基づき，スリウィジャヤ大学大学院修士課程の学生は，少なくとも36単位を修得する必要がある（内30単位－講義・演習，6単位－修士論文と口頭試問）。また，三重大学大学院博士前期課程の学生は，少なくとも30単位を修得する必要がある（内20単位－講義・演習，10単位－修士論文に関する特別研究と口頭試問）。このため，DD-IFPプログラムはインドネシア（スリウィジャヤ大学大学院）および日本（三重大学大学院）の修了要件を同時に満たすように設計されている（図7）。

プログラム1年次に履修するスリウィジャヤ大学大学院での授業科目は，主としてスリウィジャヤ大学大学院の教員が教授するが，三重大学の特別研究4単位については，三重大学大学院の教員が担当し，プログラム1年次からプログラム学生と両研究科の指導教員間で連絡を密にした継続的

指導を行うと共に，三重大学教員がスリウィジャヤ大学に赴いて集中講義形式で講義を行い要件を満たす。スリウィジャヤ大学大学院で修得した27単位の内10単位は，DD-IFPプログラムが大学間協定に基づき学生交流を行う三重大学大学院生物資源学研究科とスリウィジャヤ大学大学院作物科学研究科が教育上有益と認める特別プログラムであるので，三重大学大学院の単位として認定可能であり，三重大学大学院の修了要件に含めることができる。一方，プログラム学生が三重大学大学院における博士前期課程を修了し学位を取得するためには，プログラム2年次にさらに20単位を履修することが必要となる。この20単位の内，特別研究の4単位分はスリウィジャヤ大学におけるプログラム1年次の継続的指導によって単位認定できるので，プログラム学生はもう16単位をさらに修得する必要がある。この16単位の内，10単位は講義および演習，6単位は特別研究である。以上により，三重大学大学院の履修要件を満たすことができる。また，スリウィジャヤ大学大学院の履修要件に関しては，三重大学大学院でのプログラム2年次に修得した講義および演習の10単位は，スリウィジャヤ大学大学院の単位として読み替えることが可能であり，スリウィジャ

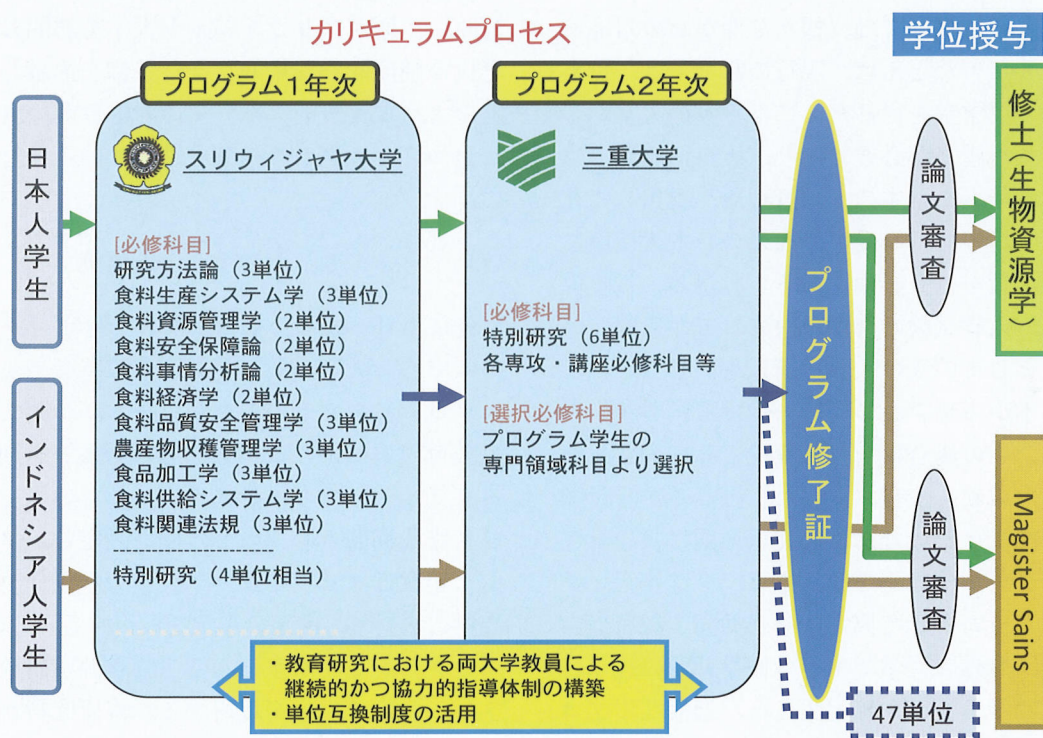


図7. ダブルディグリープログラムにおけるカリキュラムプロセスと学位授与の流れ

ヤ大学大学院の修了要件に含めることができる。したがって最終的には DD-IFP プログラム学生は、47 単位を修得することによって、プログラムを修了し、両大学の修士学位を修得する。このように2年間のプログラム履修によって2つの修士学位を修得することが可能になっているものの、47 単位というハードルの高いプログラム修了要件を設定し、身につけるべき資質を保証している。

6. 期待される成果

本プログラムの実施によって期待される成果は以下の通りである。

- (a) 両大学の相互協力によるグローバルな視点で国際的競争に対応できる有能な人材の育成。
- (b) DD-IFP プログラムを通して、三重大学大学院生物資源学研究科とスリウィジャヤ大学大学院作物科学研究科の国際共同教育研究の推進・発展とそれに伴う国際競争力の強化。
- (c) セミナー、ワークショップ、インフォメーション・コミュニケーション・テクノロジー (ICT) を利用した遠隔教育を通じて、三重大学大学院とスリウィジャヤ大学大学院の教職員、学生ならびに卒業生の相互理解の進展と協力体制の助長。
- (d) 三重大学大学院生物資源学研究科とスリウィジャヤ大学大学院作物科学研究科の協力によるダブルディグリープログラムの設立という具体的成果。

これらの成果から、本ダブルディグリープログラムは、両大学における大学院国際教育を通しての学位（修士）の国際的通用性の確保のモデルケースとなり、海外連携大学とのダブルディグリー形式も含めた連携国際教育プログラムの発展や優秀な留学生獲得の進展につながると期待できる。

7. 平成 21 年度からのプログラム開始と平成 22 年度からのプログラム学生受け入れ

スリウィジャヤ大学では、平成 20 年 10 月より第 1 期生候補 8 人が書類選考の後に事前トレーニングを開始した。一方、1 次選抜クリアの条件となっている TOEFL 550 点以上というハードルは、候補学生となるような優秀な学生にとっても高く、

最終的に 1 次選抜に合格できたのは 8 名のうち 3 名であった。平成 21 年 4 月からは、この 3 名がプログラム 1 年次生としてスリウィジャヤ大学大学院作物科学研究科にて就学している。この 3 名は、平成 21 年度に生物資源学研究科が実施する博士前期課程外国人特別選抜入学試験を受験し、合格すれば平成 22 年 4 月から生物資源学研究科にて三重大学大学院生として就学する予定である。また、三重大学側では、最初の日本人学生派遣として期待される第 2 期生候補が平成 21 年 10 月より半年間の事前トレーニングに入る予定となっている。

8. おわりに

大学教育の国際化においては、「一般学生の国際性の涵養を図る」ことも重要である。本プログラムは、時差の少ない三重大学とスリウィジャヤ大学を結んだ e-learning ビデオ会議システムを活用して実施される。従って、プログラム学生以外の両大学の大学院生、さらには学部学生もそれぞれの自国にいながらにして本プログラムにおいて開発された講義を容易に聴講することが出来る。また、日本人学生がパーソナル TA としてプログラム学生の就学の手助けをすることにより、国際理解を深めることも可能である。これらの活用によって、両大学大学院生の“国際力”の涵養を効果的に図ることができ、本プログラムは大学院生の留学推進や国際インターンシップへの参加推進に寄与できるプログラムとして大学内で位置づけられるであろう。さらに、本プログラムを継続発展させ、スリウィジャヤ大学が既にダブルディグリープログラムを実施しているオランダの UNESCO-IHE やユトレヒト大学、本学と大学間交流のある同国のワーゲニンゲン大学と共に、日本-インドネシア-オランダ 3 国間にまたがる国際教育コンソーシアムの構築を目指す構想も計画中である。本プログラムが、三重大学のみならず、日本の大学における大学院国際教育のモデルケースとなり、海外連携大学とのダブルディグリー形式も含めた連携国際教育プログラムの発展に寄与するものと期待する。